

モノと情報—博物館の役割再考—

塚越 哲
(静岡大学理学部)

博物館はモノ（標本）を半永久的に蓄積してゆきますが、それにはどんな目的があるのでしょうか。博物館に蓄積されたモノは私たちに多くの情報をもたらしますから、その情報を得るための蓄積であることは言うまでもありません。例えば図書館は出版物を同じように蓄積し、そこから情報を取り出しますが、博物館の標本の蓄積とは全く方向性が異なります。図書館の場合、主体はあくまでも情報の蓄積であり、その使命は「情報とヒトが会う場」といえるでしょう。例えばひと昔前までは古い新聞は破棄されてマイクロフィルムとして残されましたが、さらに現在は多くの出版物がデジタル情報として猛スピードで置き換わっています。図書館ではすでに、少なくとも研究現場では、モノである紙媒体よりも電子媒体の方がずっと多く利用されています。では博物館でも電子化が進み、モノが情報に置き換わるのでしょうか？それは部分的には起こりえますが根本的に置き換わることはない、というより博物館の中では主であるモノに対し、従である情報のすみわけがより鮮明になると予想されます。なぜなら博物館とはあくまでも「モノとヒトが会う場」であるからです。

モノと情報は、時間という「軸」で対比させるととりわけ違いが鮮明になります。情報は時間が経過しても変化しません。例えば古文書に記された文章の内容（情報）は今も昔も変わりません。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり・・・」と何百年も前から同じ情報を発信しています。情報は時間に対して不変なだけでなく、複製も容易です。古文書でなくても、文庫本の紙面でも、電子書籍でも同じ情報が得られます。それに対してモノはどうでしょう？平家物語の古文書本体は、どれほど厳重に保管をしても経年変化は免れません。モノこそまさに「諸行無常」なのです。複製は？どんなに精巧な複製であってもオリジナルの古文書＝モノと同じ価値にはなりません。

さらに同じ情報でも、異なったモノ（媒体）から発信されると、ヒトは全く異なった感覚を得ます。古文書に触れようやく読み取った「祇園精舎」と電子書籍のフォントから読み取ったそれとでは、大きく異なる感覚を得るでしょう。

博物館が提供する情報は、モノに対峙した個々の人がとらえた独自の情報であり、それは訪れた人の数だけ多様であるといえます。私たちは時間に対して不変で複製しても等価なバーチャルと、時間とともに変化し唯一無二のモノ＝リアルとのはざまに生きています。情報化社会の中で、私たちはますますバーチャル化された情報世界に生きる時間が長くなるでしょう。このコロナ禍での社会状況はそのことをさらに加速させた感があります。このような中で、博物館は私たちがリアル世界に生き、モノと対峙していることを実感する場として、もう一段階特別な存在となれる状況に今あると思います。

私の専門分野である生命史の中で、「カンブリアの大爆発」という事象があります。古生代・カンブリア紀の化石生物がそれまでの常識を超え、短時間で多様な生物群が進化したことを明らかにしたこの研究は、古生物学はもとより、進化生物学、遺伝学にまで波及し、今では地学ばかりでなく生物学の教科書にさえも登場するようになりました。この大発見のきっかけは、長く博物館に蓄積され続けた標本に対して数十年を隔て、新しい分類学の概念に基づいた再研究にありました。これまでどおりたゆみなく標本を蓄積し続けると同時に、新しい科学的概念や手法を積極的に取り入れてこの貴重な蓄積標本に取り組み、いつか大きな発見にたどり着くことも可能でしょう。蓄積された標本を見た若い人たちが刺激を受けて自然史分野を志し、新しい研究者が生まれることもあるでしょう。短期の成果に囚われずに進むことの大切さを教えてくれるのも、博物館の標本かもしれません。